

言語心理学

—— ことばからころをみる ——

慶應義塾大学教授 大津由紀雄

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけています。今回のテーマは言語心理学（ことばからころをみる）です。

1. 言語心理学とその方法

言語心理学 (psycholinguistics) は、言語という窓をとおして、ころ (mind) の本質を探ろうとする研究分野ですが、研究者によって、その対象も、方法も、かなりのばらつきがあります。今回は、生成文法 (generative grammar) と呼ばれる言語理論と不可分の関係にある言語心理学について解説します。なお、ここでいう「ころ」とは、人間 (ときには、人間以外の動物やコンピュータを考へることもあります) と外界の間の相互作用を支える内的メカニズムのことを意味します。例えば、母語の音声を耳にしたとき、私たちは知覚された音声に何らかの処理を加えて、その意味するところを理解します。その「何らかの処理」を行う内的なメカニズム、それがころです。言語に関連したころの動きはこのほかにいろいろあります。

言語心理学の主な研究分野として、次のものがあります。

- (1) 言語獲得 (language acquisition)
 - a. 第一言語獲得 (L1 acquisition)
 - b. 第二言語獲得 (L2 acquisition)
- (2) 言語使用 (language use)
 - a. 言語理解 (language comprehension)
 - b. 言語産出 (language production)

生成文法では、日本語文法や英文法などの個別文法 (あるいは、I 言語、II は internalized 内蔵された、の意) をそれぞれの話者 (native speakers) の脳に内蔵された知識と定義します。個別文法は普遍性と個別性を持っていますが、個別性といっても、でたらめにばらついていくわけではなく、一定の枠をはめられています。生成文法は個別文法の持つ、この普遍性と個別性を明らかにしようとしています。その際、個別文法に反映する普遍性および許容される個別性を生物学的理由による (つまり、遺伝的に決定された) ものと捉え、その理論 (普遍文法 Uni-

versal Grammar, UG) を構築することを重要な目標とします。

現在、多くの研究者の受け入れる考え方は普遍文法に対する原理とパラメータのアプローチ (Principles-and-Parameters approach to UG) と呼ばれています。そのアプローチでは、普遍文法は有限個の原理から成り、その原理の中には可変部 (パラメータ) を含むものがあると考えます。可変部を含む原理については、子どもが生後外界から取り込む情報、すなわち、経験をもとにその値を設定するのです。これは、買ってきたときのパソコンの設定をいろいろと変えて、じぶんの好みに合った機械に仕立てていくのに似ています。

生成文法の最大の特徴は、今述べたように、文法の普遍性を言語の生得性の反映とみなす点にあります。したがって、生成文法研究では、言語理論研究と言語獲得研究は不可分の関係にあるのです。

これまで述べたところは第一言語 (すなわち、母語) 獲得についてですが、第二言語獲得もそれと同質の過程 (つまり、普遍文法のパラメータ値の設定) と考えてよいのかどうかという興味深い問題があります。

また、脳に内蔵される知識として捉えられた文法は、言語理解や言語産出 (発話) の過程などで (他の知識とともに) 使用されます。こうした過程で、文法のどの部分がどのように使用されるのかに関する研究を言語使用、または言語運用 (linguistic performance) の研究と呼びます。

言語使用研究のなかでは、統語解析 (parsing) の研究が最も進んでおり、興味深い仮説が数多く提案されています。統語解析とは、言語理解において、入力文に対応する語列にその統語構造を付与する過程をいいます。言語産出に関する研究が遅れているのは、その入力のはっきりとしないため、それに係る諸要因を統制した実験が立案しにくいからです。現在のところ、言い間違い (speech errors) の分析を基盤とした研究が中心となっています。

2. 言語心理学の研究動向

言語獲得については、言語獲得に普遍文法と経験のいずれもが関与していることを示す研究が1970年代の後半から現れ始めました。1980年代に入ると、経験の主要な役割をパラメータ値の設定であることを示す研究が数多く発表されました。

1970年代に入ってから、普遍文法の発現に成熟 (maturation) が関与しているかという問題にも注目が集まっています。また、言語獲得の生得的要因は普遍文法のように言語に特化したものであるのかを再検討する動きもあります。

言語使用については、やはり統語解析の研究が盛んです。特に、知識としての文法と解析の関係について、さまざまな考え方と興味深い実験結果が数多く発表されています。

言語獲得や統語解析に関する研究は、生成文法研究に極小主義 (minimalism) が導入されたことによって、新たな展開を見せ始めています。極小主義は (非常に乱暴に言えば) 言語と他の認知機構との関連を探りながら、言語の本質に迫ることができるかどうかを探るための研究プログラムです。

さて、これまで述べてきたところは心理レベルにおける言語の研究ですが、近年の生成文法研究の進展と脳の高次機能 (言語、意識、思考など) への関心の高まりを背景に、言語の脳科学が注目を集めています。特に、PET やfMRIなどの機能イメージングの技法 (さまざまな工夫によって、脳の活性部位を特定する技法) を利用した研究が盛んです。現在のところ、これらの技法を利用して、言語に関する脳内活動の関連部位を特定することを目指した研究が多くなっています。しかし、まだ用いられる装置の時間解像度あるいは空間解像度がそれほど高くないこと、また、得られた資料を解釈するための理論が欠如していることなどの理由で、本格的な研究は今後に待たなくてはなりません。

3. 言語心理学と外国語教育

言語心理学は、言語理論と同様に基礎研究であるので、それが言語教育 (母語教育であれ、外国語教育であれ) に対して、どのような意味合いを持つかは射程に含まれていません。したがって、言語心理学の研究成果を外国語教育に安易に「応用」するという試みは慎まなくてはなりません。

外国語教育ともっとも直接的に関連するのは第二言語獲得研究です。例えば、第一言語獲得については、これこれの言語形式は非文法的であるという否定証拠 (negative evidence) (例えば、赤い花の意味での「赤い花」

は非文法的であるという情報) は必要ではないと考えられています。つまり、周囲のひとから、それは非文法的であるということは何らかの形で指摘されなくても、子どもは普遍文法および関連のメカニズムを使って、最終的にはそれが非文法的となるように日本語文法を構築するというわけです。では、第二言語獲得の場合にはどうでしょうか。否定証拠はやはり不要であるのか、あるいは、必要なのか。この問いに関する議論はまだ決着がつけられていませんが、その解答が外国語教育に対して重要な示唆を与えることは言うまでもありません。

4. 言語心理学の基本文献

言語心理学を理解するためには、生成文法を正しく理解することが必要です。それは容易なことではありませんが、まず、次の文献によって、その基本的な考え方を理解するとよいでしょう。

[1] Noam Chomsky (1988) *Language and problems of knowledge: the Managua Lectures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

次の文献には、言語心理学の分かりやすい解説とそれが人間のこころの問題とどう関連するかについての検討が満載されています。

[2] Steven Pinker (1994) *The language instinct: how the mind creates language*. New York: William Morrow.

幾分古くなってしまいましたが、第一言語獲得、第二言語獲得、言語使用についての教科書としては、次の三著が良書です。

[3] Helen Goodluck (1991) *Language acquisition: a linguistic introduction*. Oxford: Blackwell.

[4] Lydia White (1989) *Universal Grammar and second language acquisition*. Amsterdam: John Benjamins.

[5] Alan Garnham (1985) *Psycholinguistics: central topics*. London: Methuen.

日本語で書かれた文献としては、次のものがあります。[8]は言語心理学プロパーの解説書ではありませんが、中高生に言語研究のおもしろさを伝えようとしたものです。

[6] 大津由紀雄 (編著) (1995)

『認知心理学3: 言語』東京: 東京大学出版会

[7] 大津由紀雄ら (共編著) (近刊)

『言語の科学10: 言語の獲得と喪失』東京: 岩波書店

[8] 大津由紀雄 (1996)

『探検! ことばの世界』東京: NHK出版